

Market Flash

プレゼンカ ～東京五輪招致の裏舞台～

2014.06



Market Flash

～プレゼンカ～



2013年9月8日(日本時間明け方)、IOCのロゲ会長の「TOKYO」という言葉が発せられた瞬間、日本中が大きな喜びで爆発した。

世界最大のイベントであるオリンピック招致は世界最大のプレゼンでもある。今回の東京オリンピック・パラリンピック招致のプレゼンテーションにおいては、「五輪招致の請負人」と言われるニック・バーリー氏が日本チームのコンサルを務めた。

ニック・バーリー氏は、ロンドン、リオデジャネイロと2大会続けて招致に成功した。今月のレポートでは、このニック氏のプレゼンカの極意を彼の著書「世界を動かすプレゼンカ」から少し紹介すると同時に、オリンピック招致の裏舞台を、長年に渡りオリンピック招致活動を中心に取材活動を続け、多くのIOCメンバーとも親交の深い読売新聞社の結城和香子女史の著書「オリンピックの光と影」から紹介する。

「世界を動かすプレゼンカ」

バーリー氏は、今回の最終プレゼンが成功した理由を、プレゼンの内容、そしてスピーカーたちの力強いパフォーマンスによって、世界が東京に対して抱いていたイメージとは違う東京を見せることができたから、としています。

そして、最も重要なのが、ストーリー・テリング(ストーリーを語ること)だとしています。

上記でご紹介した結城女史の著者と合わせて読むと非常に面白いのですが、今回の招致における最終プレゼンに至るまでの様々な過程が、東京に優位に働き、最終プレゼンのストーリーをさらに引き立たせたということがわかります。ここで一つだけ例を挙げれば、福島原発の汚染水問題は、最終段階になって東京の致命的な問題でした。しかし、安倍首相がロシアで直前に行われていたG20からスペインとトルコの首相より一足先にブエノスアイレス入りしたこと(G20の最後の集合写真にはスペインとトルコの首相の姿はあったが、日本は麻生副総裁が写っていた)、そして、原発の汚染水問題について具体的に説明をし、最後にあの「under control」と国を代表して発言したことで流れを引き寄せ、最終プレゼンでは東日本大震災を通して「スポーツの力」がいかに偉大であったかを訴えた、このストーリー性が多くのIOC委員の心を捉えたといっていだらう。

このように最終プレゼンでは、「スポーツの力」をテーマにストーリーが描かれた。皆さんの記憶にも残っているでしょう、あのプレゼンの間に流れた少年とプロバスケットボール選手の映像とその少年が大きくなって今度は貧しい子供たちにバスケットを教える映像、これも「スポーツの力」の象徴であった。

バーリー氏は、コンサルタントとして東京を選んだ(実際、全ての都市からコンサルタントとしてのオファーを受けていたという)時から、最終プレゼンまでこのストーリーをいかに描いてきたかがこの本に記されています。

そして、誰が何を話して、どの順番にするか、全てがストーリーされていたのである。ちなみに、バーリー氏が東京を選んだ理由は、①2016年の招致でなぜ東京が成功できなかったかよく理解できたこと、②日本文化と東京に対する個人的な憧れ、③東京の招致チームのメンバーと会ってみて、個人的な相性の良さを感じたこと、が決め手となったようだ。





Market Flash

～プレゼンカ～



さて、最終プレゼンの各人のスピーチがどのように作られ、各人が抱えた問題とそれをどう解消していったか、いかに訴えられるスピーチに仕上げていったかは是非本を読んでください。

ここでは、バーリー氏が説く、**プレゼンを成功に導く7つの戦略**を簡単にご紹介します。

戦略1

まず数字から —与えられた条件から計算しよう—

プレゼンに際して自分に与えられた条件をしっかりと分析することが重要である。

- 時間配分を考える。オーディエンスの集中力が続くのは5分。
- プレゼンはチームで行う方が効果的。実際の組織を反映した性別・年齢・キャラクター構成を
- オーディエンスは、一緒に仕事ができる相手かどうかをプレゼンメンバーで判断する
- はなすスピードは普段の3分の2ぐらい。英語なら1分に120語程度まで

戦略2

オーディエンスを理解する —相手について、できるだけのことを調べていこう—

- まずはオーディエンスの構成要素を徹底的に分析する
- オーディエンスが聞きたがっている本当の答えを探る。緻密な情報収集がカギ
- オーディエンスに合わせてプレゼンをカスタマイズする

戦略3

インパクトを演出する —プレゼンの中に驚きの要素を入れよう—

- プレゼンのオープニングでインパクトを与えれば、オーディエンスの興味を引ける
- ビジュアルを有効に使う。1枚の画像がプレゼンを決める
- レス・イズ・モア。短くてインパクトがある言葉を選ぼう
- オーディエンスを「もっと知りたい」という気持ちにさせる

戦略4

インパクトを持続させる —聴衆を飽きさせないために考えるべきこと—

- プレゼンのテンションをコントロールする。心地よい緩急を
- 細かい事実関係は「低」、感情に訴えるパートは「高」
- 映像、言語、視線の向きを変えさせるなど、緩急の付け方を多彩に

戦略5

視覚に訴える —ビジュアルは賢く、適切に使おう—

- スピーチとビジュアルをシンクロさせることで劇的な効果がある
- 話す内容をそのままプレゼン用ソフトに書いてはいけない
- スクリーンに映っているものを読み上げてはいけない
- 1枚のスライドに情報は一つ



Market Flash

～プレゼンカ～



戦略6

明確なビジョンを持つ —プレゼンでは必ず新しい視点を提供しよう—

- 自分の意見をはっきり言うことは、傲慢なことではない
- 聴衆にとって新しい情報や視点をプレゼンに必ず加える
- リーダーはプロジェクトの顔。細部よりもビジョンを語ろう。



戦略7

パフォーマンス —優れたストーリーを練習で補強する—

- プレゼンは演技。それは実社会にも通じる
- ジョブズもオバマも練習を重ねてうまくなった
- プレゼンのチャンスは一度しかない。何十回でも練習しよう

バーリー氏の唱えるプレゼン力を高めるこれらの戦略を駆使して出来上がったのが、今回の最終プレゼンであった。バーリー氏が苦労した点は、外国人が描く日本人のイメージ(グレーのスーツを着た男性たちがお辞儀をしながら名刺交換する姿)を打破することであった。そのために、「英語を操り、時には冗談を言ったりもする、外交的な文化、若い女性も活躍できる社会」というイメージを打ち出したという。

たしかに、最終プレゼンでは、日本人から見るとややオーバーリアクションであったり、やや不自然な笑顔であったりという面も見られたが、これらのことが外国人にはいい印象につながったのだろう。さらに、英語ばかりでなくフランス語でのスピーチも非常に効果的であった。(IOC委員多くはフランス語圏)

バーリー氏は、著書の中でこれら7つの戦略以外に、繰り返し述べていたのが「**3のパワー**」である。

コミュニケーションにおいて、「3」というのは、最も効果的な数字で、「ABC」「123」のように、文字や単語は3つが組み合わさると、一番人の記憶に残りやすいとされている。

「3のパワー」は歴史に残る優れたスピーチなら必ずと言っていいほど使われているテクニック。例えば単語を3語続けて使う、3つの質問を続けて投げる、同じ疑問への答えを3つ重ねる、など。今回の最終プレゼンでのこの手法があちこちで使われていた。

例えば、太田選手のスピーチでは、「想像してみてください」のあとに、「東京という都市のまさに中心で生活すること」「目覚めれば素晴らしい水辺の景色があること」「寝室から見える競技会場で競技すること」と、想像すべきシーンを3つ並べている。

バーリー氏は、最後に、**五輪が来るということは、世界最大のマーケティング・チャンスでもある。これからいかにして日本が国際社会にアピールし、グローバルな社会において主要国として強い立場を確保するチャンスでもある。東京オリンピック・パラリンピックは、その第一歩として最大のチャンスなのだ**と締めくくっている。

～東京五輪招致の裏舞台～

2013年9月7日、アルゼンチン・ブエノスアイレスで開かれた国際オリンピック委員会(IOC)総会で、2020年オリンピック・パラリンピック開催都市決定投票が行われた。

第1回目の投票でロゲ会長が、「イスタンブールとマドリードが同数となった。タイブレークの投票を行う」と唐突に発言したのだから、この時点で東京が落ちたと思った関係者も多かった。その後行われた決選投票で今度は、「49票で、イスタンブールが上回った」と発表。ここで、イスタンブールが開催都市に決定したと報道したメディアもあり、中国国内では新聞まで刷ってしまった。

イスタンブールとの決選投票が終わり、再びロゲ会長が結果の入った封筒を破り、中に入っていたカードを取り出しひっくり返すと同時に、「TOKYO」と宣言した。

最終的には、東京60、イスタンブール36と圧勝であった。

席から飛び上がり、涙と歓声で湧き上がる招致団。この光景は、今でも私たちのまぶたに焼き付いている。しかし、ここに至るまでは決して楽観できるものではなかったし、むしろ、直前までは他の候補地の方が有利だったようである。この招致決定の裏舞台を密着取材していたのが結城女史である。「**オリンピックの光と影**」という著書に詳しく語られている。大変面白い本なので是非一読をお勧めする。



さて、その本を読んでみると、**今回の招致成功には幾つかの運といく人かのキーパーソンがいた。それは、「敵失」という運と、安部総理と高円宮妃久子さまというキーパーソンであった。**もちろん最終プレゼンの素晴らしいときは第一にあげておかなければならない。これはどちらかというと、我々にも見れた表舞台の世界である。また、このプレゼンの成功については前述のバーリー氏の手腕によるところが大きい。

2013年1月から国際招致活動が解禁になりIOC総会の9月まで、各都市の評価は目まぐるしく変わっていった。

イスタンブールは、欧州とアジアをつなぐイスラム圏での初めてのオリンピックを最大の謳い文句として攻勢を強めていた。

マドリードは、12年、16年五輪に続く3大会連続の立候補。この間に会場建設や交通網の整備を進め、開催に必要なインフラ整備費は約15億ユーロ(約1950億円)と近年の五輪では極めて少ない。

またマドリードには、2人の大きな力があつた。フェリペ皇太子とファンアントニオ・サマランチ・ジュニアIOC理事だ。フェリペ皇太子は、自らが1992年のバルセロナオリンピックのヨット選手であり、今回の招致においても当初から積極的なロビ活動を行っていた。サマランチ・ジュニアIOC理事は、言わずと知れた元IOCのサマランチ会長のご子息で、今回の招致でもかなりの影響力を持っていると言われていた。

東京は、コンパクトな開催地と経済力をバックにした確実な実行力をうりにしていた。

一方で、**3都市が3様の弱点を抱えていた。イスタンブールは大規模なインフラ整備と交通渋滞。東京は、東日本大震災の余波と、直前の冬季五輪が同じアジア権の韓国で開催されること。マドリードは、スペインの深刻な経済危機**。

～東京五輪招致の裏舞台～

当初は、イスタンブールが五輪開催の名目としては最も優位と見られていた。それが大きく変わったのが、5月の反政府デモが起こってからだった。これは、今回の招致レースの流れを根底から覆してしまった。当初はゲジ公園の再開発をめぐる抗議活動であったが、これにトルコ各地の都市で、エルドアン首相が進めるイスラム文化の流れに反対する若者が呼応して飛び火した。反政府デモの嵐は約2週間続いたが、最終的には政府による強制排除を受け鎮静化した。しかし、オリンピック招致への影響は計り知れないものとなった。

その後、7月に行われたプレゼンではマドリードが素晴らしいプレゼンを行い、IOC委員の心をつかんだ。

そして、マドリードの絶対的優位となったのが、8月21日に福島原発の汚染水漏れが見つかり、連日危機感を煽る報道がなされてからだ。最終プレゼンを目前にして、この汚染水問題は、東京

招致チームには大きな打撃となった。記者会見などの質問にもこの汚染水問題ばかりが取りざたされた。しかし、招致チームにはそれに明確に答える術を持ち合わせていなかったのである。

こうして、東京、イスタンブールに逆風が吹く中、9月のIOC総会を迎えるのであった。では、どこでその逆風が変わったのであろうか。それは、まずマドリードの敵失が原因となった。(以下、著書から一部抜粋)

プレゼンテーションでのアピール点		
 スペイン マドリード 過去2度の招致で建設が進み、会場の80%が既存 経済危機でも開催費用は少なく、リスクはゼロ	 トルコ イスタンブール 急速な経済発展で、2002年以降、1人当たりの国内総生産(GDP)は3倍に成長 トルコ建国100年となる2023年に向けた国家計画の一環として開催する五輪	 日本 東京 昼夜を問わず、誰もが安心して歩ける世界で最も安全な都市 会場の85%は選手村から8キロ圏内 世界トップクラスの交通網で快適な輸送を提供

「98人のIOC委員のうち50人がマドリードに投票を表明」

スペインの地元紙エル・ムンドが、9月4日付で掲載したスクープ記事が、マドリード招致関係者の間で波紋を呼んだ。IOC委員全員の名前とご丁寧に一部顔写真まで入れて、「マドリードに投票する委員50人プラス1」「まだ決めていない委員33人」「マドリードに投票しない委員14人」とした。

秘密投票なのに自身の支持を「すっぱ抜かれた」形のIOC委員にしてみれば、合っている間違っていても面白くない。……この一件は関係者の間では「鉛の風船(皆にネガティブに受け取られること)」に喩えられ、かなりマイナスに受け取られた。

招致では、投票前に勝利宣言と取られるコメントを出したり、勝利を確信したような態度をとることは、逆に敗退しかねないとされている。

2012年のオリンピック招致では、絶対的有利で圧勝するとみられていたパリが4票さでロンドンに敗れた時も直前でのパリ陣営の失敗であった。英国のブレア首相は決定投票の3日前に総会開催地に入りシンガポールに入り、精力的にIOC委員と個別会談した。それに対し、フランスのシラク大統領は、勝利は揺るがないとみたのか前日に現地に入ってきた。



Market Flash

～東京五輪招致の裏舞台～



そして、パリ市長が前日に記者会見という名目で盛大なイベントを行い、実質的な勝利宣言のようなパフォーマンスをした。さらに、シラク大統領は、IOC委員との個別面談など積極姿勢は見せないまま、早々にシンガポールの最高級ホテル、ラッフルズに引き上げた。加えてこともあろうに、ロンドンの追い上げが伝えられたからか、フランスに比べ美食度でははるかに劣る英国にIOC委員が行きたがるはずがない、という皮肉を込めて、「英国より食事がまずいのはフィンランドぐらいだ」と冗談に言った。この一言が命取りになった。

さて、今回のエル・ムンド紙の報道で、マドリードは10票は失ったとした。さらに、これがマドリード陣営内部に亀裂が生じた。いったい誰がリークしたのか、関係者を問い詰める非公式の調査が行われたとも聞く。

同じく4日、結城女史が東京にとって風が変わってきたと感じた出来事があった。それが、高円宮妃久子さまの到着である。久子さまは積極的にIOC委員と談笑されていた。マドリード招致活動を率いる立場で動いているフィリペ皇太子と違い、日本の皇族の方々は、立场上招致活動などに関係することができない。だから久子さまも今回、名誉総裁を務められる日本サッカー協会の関連行事でブエノスアイレスにいらっしやり、「たまたま」その時期に開かれていたIOC総会で、東日本大震災時にIOCが行った被災地支援への感謝の辞をお述べになるということになっていた。IOC委員にも個別にお会いになり、直接感謝をお伝えになる。招致については一切触れないということになっていたようである。しかし、結城女史は、何人ものIOC委員から久子さまの英語は本当に素晴らしいなど様々な賛辞を聞いたという。この久子さまの存在感が流れを東京に引き寄せていった。

さらに、この日に東京招致による汚染水問題への対応の戦略転換が始まった。

当初は質問があれば答えるという方針でいたが、安倍首相から最終プレゼンできちっと説明することになった。この安倍首相の存在も引き立った。前にも述べたように、安倍首相はG20からトルコ、スペインの首相より一足先にブエノスアイレス入りし、積極的なロビ活動を行い、そして、汚染水問題への戦略も事前に変更することができたのである。

さらに、今回の招致活動で争点となったのが「ドーピング問題」であった。

東京は、戦略的にドーピングの話題を出していた。日本は、過去のオリンピック・パラリンピックでただ1人もドーピングで陽性になっていないということを強調していた。これは、ライバルであるマドリードとイスタンブールに対するパンチでもあった。

イスタンブールは、8月の世界陸上前に31人のトルコ選手が薬物に陽性となり、ラミン・ディアック国際陸連会長が、「招致をする前に自分の家をきれいにすべきだ」と批判した。一方のマドリード。スペインは長年、法律による規制が難しかったこともあり、ドーピングに使われる薬物供給源であるとの噂や、薬物指南の闇ネットワークなどに絡むスキャンダルを抱えてきた。

50人以上の自転車選手、サッカーやテニス選手との関係が疑われていたドーピングの指南役であった医師に対する裁判で、執行猶予付き禁固1年という非常に軽い刑が言い渡された。

このドーピング問題も最終プレゼンにおいて東京優位を導く要因となった。

さて、このように反政府デモとドーピング問題で評価を落としたイスタンブール、直前のマスコミによる報道で信用を失ったマドリード、そうした敵失を味方につけ、さらに、久子さまと安倍首相の積極的なアピールで風を呼び込み最終プレゼンに臨んだのであった。



Market Flash

～東京五輪招致の裏舞台～



<最終プレゼンでのポイント>

【イスタンブール】

「何千年もの間、太陽は欧州とアジア2つの大陸に上がってきた。今、その太陽は、2つの大陸に同時に微笑みかける」というスピーチで始まった。

イスタンブールの最終プレゼンでのポイントは、エルドアン首相のスピーチであった。エルドアン首相は、「トルコ語で話します」と言って話し始めた。このトルコ語でのスピーチの良し悪しはいろいろ言われているが、少なくとも日本のフランス語でのスピーチと比較されたであろう。そして、首相は、反政府デモには一切触れることはなかった。これも、安倍首相が汚染水問題に言及したことと比較された。

質問の真意: プレゼンの後の質問は、その委員がどこの都市を支持し、どういう意図でこの質問をしているのかが見透かせるものが多いという。

イスタンブールへの質問は、

「五輪開催はトルコだけでなく、地域全体に素晴らしい影響をもたらすという。どうやってそれを達成するのでしょうか」

⇒これは支持派の質問とみられる。

「アンチ・ドーピングに、より真剣に取り組んでいってほしいのは心強い限りですが、これだけの陽性事例が出たことをどうお考えですか」

「選手はどこに宿泊し、どうやって競技会場に通うのか。イスタンブールの交通状況は容易ではない。私も自分の経験から、渋滞がひどいことをよく知っているのだから聞いています」

⇒これらはイスタンブールの弱点を単刀直入についてきた質問で、イスタンブールにとってはマイナスとなった。なぜなら、それに対して明確な回答ができなかったからである。

【東京】

東京の最終プレゼンは、まず、久子さまの登壇で始まった。そして、格調高いフランス語で語り始めた。このスピーチを含む久子さまの存在を、その後多くのIOC委員が、東京の勝因の柱の一つに数えた。

実は、この久子さまのスピーチは、クレイグ・リーディーIOC副会長が竹田会長にアドバイスしたそうである。

もう一つの勝因は、安倍首相のスピーチで、汚染水問題について発言したことである。いろいろと議論はあったが、一国の代表である首相が、「私が保証します。状況はコントロールできています。東京には、これまでもそしてこれからも、何ら影響は及びません」と明言したのである。スピーチのこの一言を入れると決まったのは、ぎりぎりの前日であったようだ。

Market Flash

～東京五輪招致の裏舞台～



そして、もう一つ巧みに仕組まれていたのが質疑応答だ。ノルウェーのゲルハルト・ハイベルク委員が、「素晴らしい情に訴えるプレゼンテーションでした。ただ、私たちはフクシマについて多くのことを耳にします。安倍首相が東京に影響がないとおっしゃるのは信じたいと思いますが、失礼ながらどのような対策をおとりになるから、そのように言えるのかを、技術的に詳しく教えてください」と質問した。

実はこれは、竹田委員長が事前にハイベルク委員に、「聞き足りないと思うので、どうぞ首相に質問をしてほしい」と依頼していた。プレゼンの中で汚染水について詳しく述べる時間もなかったため、あえて「コントロールされている」とだけ言って、この質問によって、安倍首相がさらに具体的な数値を用いて今の状況を説明したのであった。さらに、安倍首相の回答はそれだけにとどまらず、被災地で外国人サッカー選手からもらったボールを大事に抱えている少年に出会ったエピソードを紹介し、スポーツの力を唱え、IOC委員の心を捉えたのである。

この安倍首相のスピーチは、スペインのラホイ首相が経税不況の懸念払しょくには何ら貢献もしなかったこと、トルコのエルドアン首相は、反政府デモによる社会不安の問題を避けたことと対比されたのである。

【マドリード】

マドリードのプレゼン自体は戦略的にあまりいいアプローチではなかったようである。

質疑応答

「アンチ・ドーピングについてどのように対処していくのか」という質問に対して、「スペインの状況は、他の国と変わりはない。過去に問題はあったが、法律を厳格化し、選手やその周辺でドーピングに加担した者は処罰した。我々が信頼できるパートナーであることは疑わないでほしい我々は不正のないスポーツを目指し、常にあなた方とともにある」と回答した。しかし、問題の医師には執行猶予を与え、選手の摘発につながる証拠の血液袋の破棄を司法が命じるような国では、まだまだ課題は山積しているのは誰もが感じたことだ。

このように、東京の最終プレゼンは、IOC委員の共感を得、心に訴えたのである。

もちろんここに書かなかったすべてのスピーカーが素晴らしいプレゼンを行ったから成功したのであることは言うまでもない。

東京は、東日本大震災による原発問題を抱えながら、その震災からの復興の過程において、いかに「スポーツの力」が人々に勇気と感動を与えたか、そのストーリーを貫いたことにより、今回の招致を成功させたのだろう。

2020年、日本は、東日本大震災から完全に復興を果たし、世界の国々の人々を「お・も・て・な・し」で迎えなければならない。それが、オリンピック開催国としての義務である。

今回の東京の招致活動の成功の裏舞台ではまだまださまざまなドラマがあったようである。

ここでご紹介したのはそのほんの一部だ。

詳しくは、是非「オリンピックの光と影」を読んでいただきたい。



～ワールドカップおもしろ雑学～

ワールドカップが始まった！ 初戦は残念ながら惜敗であったが、ここから日本の底力を見せてほしい！

ワールドカップを楽しむための雑学を集めてみた

W杯戦士の年収ランキング

サッカー界の超一流選手が集うワールドカップ(W杯)。もちろん選手たちの収入も超破格だ。この5月、アメリカ経済誌『フォーブス』が2012-2013シーズンのサッカー選手の収入ランキングを発表。それを今大会に登録されたメンバーに限定し、ベスト10を並べると以下の通りになる。ちなみに金額はクラブから受け取る年俸に広告収入を足したものである。

- 1位 クリスティアーノ・ロナウド(ポルトガル代表) 約74億2000万円
- 2位 リオネル・ messi(アルゼンチン代表) 約66億1000万円
- 3位 ネイマール(ブラジル代表) 約28億5000万円
- 4位 ウェイン・ルーニー(イングランド代表) 約22億4000万円
- 5位 セルヒオ・アグエロ(アルゼンチン代表) 約21億4000万円
- 5位 ヤヤ・トゥーレ(コートジボワール代表) 約21億4000万円
- 7位 フェルナンド・トーレス(スペイン代表) 約20億3000万円
- 8位 ロビン・ファン・ペルシー(オランダ代表) 約19億3000万円
- 9位 フランク・リベリー(フランス代表) 約18億3000万円
- 10位 スティーヴン・ジェラード(イングランド代表) 約17億3000万円



やはり、人気、実力ともにトップのクリスティアーノ・ロナウドとリオネル・messi強し。圧倒的なワンツーフイニッシュである。そして、これらの選手たちはFWもしくは攻撃的なMFで、多くの収入を手にはしているのはオフェンス陣であることがわかる。それだけ「ゴール」という結果を残せる選手が重宝されるということだろう。今大会でも記憶だけでなく、記録に残る活躍が期待される。

残念なことに日本人選手の名前は10位以内になかったが、はたして日本代表選手はどれほどの収入を得ているのか(※各紙報道より。2013-2014シーズン)。

1位 香川真司

約8億4000万円。世界のスポーツ界で最も大きな資産価値を持つマンチェスター・ユナイテッドに所属。ドイツ・ドルトムントから移籍した際、年俸は倍以上となり、さらに広告収入も上昇。日本で最も稼ぐサッカー選手となった。

2位 本田圭佑

約7億7000万円。今年1月に世界屈指のビッグクラブであるイタリア・ACミランに移籍。年俸は倍増することに。さらに広告収入も大きく、香川に肉迫。

3位 長友佑都

約5億2000万円。本田同様、イタリアの富豪クラブであるインテル・ミラノに在籍。2000万円超だったJリーグ在籍時から大幅にアップした。広告収入に加え、著書の売り上げも大きいと言われている。


 ~ワールドカップおもしろ雑学~

3位 長谷部誠

約5億2000万円。ビッグクラブに所属しているわけではないが、活躍が認められ、高収入を得ている。そして、著書『心を整える』が売上100万部を超えるベストセラーに。ただ、印税はすべて全額、東日本大震災の被災地に寄付した

5位 吉田麻也

約3億9000万円。イングランドプレミアリーグ・サウサンプトン所属。プレミアリーグは総収入3860億円で、現在、世界で最も潤っているリーグといわれることも高給のゆえんか。

さて、お金に関してもう一つ気になるのが、W杯に出場すると儲かるのか？ という点。まずW杯出場国には国際サッカー連盟(FIFA)から経費として1億5000万円支払われ、出場料として約8億円が支給される。つまり、参加するだけで各国のサッカー協会には**最低でも9億5000万円**の収入が保証されているのだ。

さらに

優勝:3,500万ドル(35億円)

準優勝:2500万ドル(25億円)

3位:2200万ドル(22億円)

4位:2000万ドル(20億円)

ベスト8:1400万ドル(14億円)

ベスト16:900万ドル(9億円)


の報酬が約束されている。賞金総額は586億円にも上る。

W杯で勝つのはもちろん名誉なことだが、金銭面でも世界最高水準のリターンを手に行けるのである。

だが、選手の勝利ボーナスに関しては各国で設定が異なる。日本代表は前回大会よりも増額されることが決定。昨年から日本サッカー協会と日本プロサッカー選手会とが何度も協議を重ねた結果、勝利給は200万円から300万円に、優勝ボーナスは5000万円から6000万円にアップすることとなった。2勝1分で決勝トーナメントに出場した場合、300万円+300万円+50万円(引き分け)+600万円(ベスト16ボーナス)=1250万円が全選手に支給されることとなる。ただし、日当は1万円と少なめ。キャンプから大会期間中まで2カ月近く拘束されてもせいぜい50万円程度。ふつうの会社員ならともかく、一流のアスリートへの「手当」としては意外にも格安だ。

では他の国はどうか？

最も高額な優勝ボーナスを設定しているのはスペインといわれている。優勝した場合、スペインサッカー協会は約1億円を選手とスタッフ全員に支払う契約を結んでいる。この他、イングランドは約6000万円、ブラジルとフランスは約4600万円、ドイツは約4200万円とのこと。つまり優勝ボーナスの金額だけを見れば、日本は意外にも世界トップクラス。お金だけのためにプレーするわけではないだろうが、モチベーションの一因になっているのかもしれない。その活躍が期待される。


 ~ワールドカップおもしろ雑学~
W杯お騒がせ? 「悪童」ワースト5

名選手が集うワールドカップ(W杯)。ただ、なかには「悪童」と呼ばれる選手も存在する。まもなく開幕するブラジル大会の出場選手のなかから、ピッチ内・外における素行の悪さで世間を騒がせる「悪童」ワースト5をご紹介します！

1位 マリオ・パロテッリ(イタリア代表FW)

現在のサッカー界における「悪童」の横綱的存在。ストライカーとして異次元の資質を持ち合わせているが、お騒がせぶりも異次元レベル。監督やチームメイト、対戦相手とトラブルを起こすことは日常茶飯事。U-21イタリア代表時代には、朝までディスコで遊んだ挙句飛行機に乗り遅れて監督の激怒を買ったり、自宅の浴室で花火を打ち上げてボヤ騒ぎを起こしたり、育成組織の選手にダーツを投げつけたり、無許可で女性刑務所に行きついで拘束されたりと、「悪童エピソード」は数知れず。今大会、彼が集める注目は「ストライカー」としてか、それとも「悪童」としてか？ どちらにせよ、気になる選手である。

2位 ルイス・スアレス(ウルグアイ代表FW)

今季イングランド・プレミアリーグで、2位に10点差をつけて得点王に輝いた天才ストライカー。だが、輝かしい実績とは裏腹に、数々の愚行で世間を騒がせてきた選手でもある。暴力行為や人種差別的な言動を重ねて批判を浴び、イギリスの某サッカーサイトでは「プレミアリーグで最も嫌われている選手」にも選ばれた。最も悪名をとどろかせたのが2013年の「噛みつき事件」。リーグ戦の試合中に対戦相手の腕に噛みつき、10試合の出場停止処分。今大会、「点取り屋」に徹することができれば、まぶしいほどのスポットライトを浴びることになるだろうが、果たしてどうなるか...？

3位 ペペ(ポルトガル代表DF)

『有吉・マツコの怒り新党』(テレビ朝日)の「新3大〇〇」のコーナーで「新3大『悪童ペペの奔放なプレー』」として取り上げられたほど、ラフプレーが多い選手として有名。悪質なファウルを犯すことはDFならば多々あることだが、彼の場合はその後に相手を蹴ったり、踏みつけたりして非難を浴びてきた。欧州王者のリアル・マドリーに所属していることが示すように実力は申し分ない。ただ、時折見せる悪癖が顔を出せば、ポルトガル代表は窮地に陥ることだろう。

4位 パトリス・エヴラ(フランス代表DF)

「口は災いのもと」という言葉があるが、まさに彼は「口」で問題を起こしてきた選手。ライバルチームに勝利した後、「11人の大人と11人の子供でサッカーをしているようだった」と発言して物議を醸し、2010年の南アフリカW杯時、チームメイトが監督と衝突してチームを追放された際、「(チームには)裏切り者がいる」とメディアに語って問題となった。今大会、フランス代表の命運は彼の「口」に懸かっている!?

5位 アントニオ・カッサーノ(イタリア代表MF)

若い頃から「天才」と呼ばれて注目を集めてきたが、度重なるトラブルで自らのキャリアに傷をつけてきた選手。無免許運転によるスピード違反で逮捕されること数回。チームメイトと喧嘩は当たり前で、監督と衝突してチームを追いつけられたこともある。そんな彼がイタリア国民の心をわしづかみにしたのが2008年のヨーロッパ選手権。グループリーグ突破を決めた後、喜びのあまり、パンツ一丁でサポーターの前に現れて踊りまくったのだ。素行は悪いが、才能は抜群でかわいげもある、どこか憎めない選手だ。

これらの選手に共通するのが「悪童」でありながらも「超一流選手」であるということ。トラブルに期待して観戦していても、いつのまにかそのプレーに魅せられているかもしれない。W杯ブラジル大会では、悪童の“活躍”に注目だ！

～ワールドカップおもしろ雑学～

第1回W杯、日本は出場辞退だった

第1回大会から84年。日本はもはやW杯に出場することだけが目標ではなくなった。今大会の日本代表には過去最高のベスト16を超える成績を狙ってほしい

1997年11月16日、「ジョホールバルの歓喜」で日本のサッカーの歴史は大きく変わった。ついにワールドカップ(W杯)の出場を手にし、以降、今回のブラジル大会まで5大会連続の出場。これまで日本の前に立ちはだかつてきた壁を突き破った17年前の勝利は、今でも多くのサッカーファンの脳裏に焼き付いていることだろう。

日本のW杯への思いは、その初出場まで高い壁に阻まれてきたように思われがちだが、それは正しいようで、若干ニュアンスが異なる。W杯の初出場は簡単に手に入るところにありながら、みすみす手放してきた過去もあるのだ。

たとえば第1回の1930年ウルグアイ大会。これは南米開催ということで、欧州勢の多くが出場を断念。当時の移動は船であり、その長旅を嫌がったことが原因だという。そこで国際サッカー連盟(FIFA)は加盟国すべてに招待状を送ったものの、日本は不参加を表明したのだ。当時の日本は1927年に起きた昭和金融恐慌による経済不況の真っただ中。協会自体も財政難で渡航費を捻出できないため、辞退せざるを得なかったという。渡航費さえあれば、日本のW杯初出場は意外にも第1回から成し遂げられていたかもしれない。

また、第3回の1938年フランス大会で日本は、初めてW杯にエントリー。オランダ領東インドとの直接対決に勝てば本大会出場が決まることとなっていた。が、日中戦争が激化しW杯どころではなくなってしまったため辞退したようだ。現在では、数多くの予選試合を経ないとW杯出場は勝ち取れないが、当時はたった1つの国に勝ちさえすれば出場できたという。戦争に阻まれたあたり、これもまた歴史のいたずらだろう。

また、1958年の第6回スウェーデン大会も視野に入っていたが、W杯に出場した選手はオリンピックに出られないこと、同年には東京でアジア大会が開催されることなどの理由により、日本は参加の申し込みをしなかったという。1950～60年代当時、日本はアマチュアリズム全盛の時代で、W杯よりオリンピック優先。特に1964年の東京オリンピックまでは、サッカーも他のスポーツと同様、オリンピックに照準を合わせて強化が行われたのだ。

そもそも当時の日本はW杯の価値をそれほど理解しておらず、アジア予選におけるバックアップ体制も万全ではなかった。むしろ、オリンピックに向けての強化試合ぐらいの認識が強かったという。その結果、東京オリンピックでは予選リーグを突破して決勝トーナメント出場を果たし、1968年メキシコオリンピックでは銅メダルを獲得した。

それだけの力があっただけに、当時W杯に注力できていれば、日本のサッカー史も変わっていたのではないかと悔やまれる。しかし、そうした過去も踏まえて日本サッカーの歴史といえるだろう。今大会の日本代表には、歴史を変えるような戦いぶりに期待したいところだ。



～ワールドカップおもしろ雑学～

W杯攻撃力・守備力 歴代1位は？

サッカーワールドカップの歴史において、最も攻撃的なチームは？ そして、最も守備の堅いチームはどこだろう？

●歴代合計得点数

- 1位 ブラジル(210点)
- 2位 ドイツ(206点)
- 3位 イタリア(126点)

●歴代合計失点数

- 1位 ドイツ(117点)
- 2位 メキシコ(87点)
- 3位 ブラジル(86点)

第1回のウルグアイ大会から前回の南アフリカ大会まで、過去19回の国別得点数は210点でブラジルがトップ。2位がドイツの206点で3位がイタリアの126点と並ぶ。失点数1位はドイツの117点、2位は87点のメキシコで、3位はブラジルの86点。ただ、これらは出場回数や試合数が大きく影響しているため、単純に「攻撃力」と「守備力」を表しているとは言い難い。では、過去10大会に絞るとどういう結果が出るか？ 1974年西ドイツ大会から2010年南アフリカ大会までの各国の戦績を集積してみた。

●直近10大会得点数

- 1位 ドイツ(119得点)
- 2位 ブラジル(107得点)
- 3位 アルゼンチン(92得点)
- 4位 イタリア(78得点)
- 5位 オランダ(69得点)

119得点を挙げたドイツが1位に。ブラジルは107点で2位。ドイツが65試合と最多で、ブラジルが59試合。6試合の開きがあるとはいえ、ゲルト・ミュラーやユルゲン・クリンスマンなど名ストライカーを輩出してきたドイツの得点力が光っている。そして、アルゼンチンの92得点(54試合)、イタリア78得点(54試合)、オランダ69得点(41試合)、スペイン68得点(41試合)と続く。ちなみに日本は19位タイの12得点。

●1試合平均得点(直近10大会)

- 1位 ロシア 1.89得点(34得点/18試合)
- 2位 ドイツ 1.83得点(119得点/65試合)
- 3位 ブラジル 1.81得点(107得点/59試合)
- 4位 アルゼンチン 1.70得点(92得点/54試合)
- 5位 オランダ 1.68得点(69得点/41試合)

1位は1.89得点のロシア。2位に1.83得点のドイツ、3位に1.81得点のブラジル。ロシアはいわば“固め打ち”を得意としているチーム。その象徴が1994年アメリカ大会の予選リーグ最終戦だろう。ロシアは予選リーグで敗退したものの、最終戦でカメルーンに6対1の大勝をおさめ、その試合で5得点を決めたFWオレグ・サレンコがブルガリア代表FWフリスト・ストイチコフと並んで大会得点王に輝いた。その試合以外にも90年イタリア大会ではカメルーンに4対0、86年メキシコ大会ではハンガリーに6対0と大勝をおさめている。今大会もゴールラッシュなるか。ちなみに日本は1試合平均得点0.86点で24位となっている。

●1試合平均失点(直近10大会)

- 1位 ブラジル 0.66失点(39失点/59試合)
- 2位 イングランド 0.69失点(24失点/35試合)
- 3位 スイス 0.73失点(8失点/11試合)
- 4位 イタリア 0.81失点(44失点/54試合)
- 5位 ポルトガル 0.82失点(14失点/17試合)

1試合当たりの平均で見ると、1位は0.66失点のブラジル。攻撃的なイメージがあるだけに意外と思われるかもしれないが、実は守備の堅さも際立っており、それが伝統の強さを支えている。2位には0.69失点のイングランド、3位には0.73点のスイスが並び、“カテナチオ”で有名なイタリアは0.81失点で4位である。ブラジルよりも失点率が高いのはちょっと意外な気がしないでもない。そして、日本は16位の1.14点。

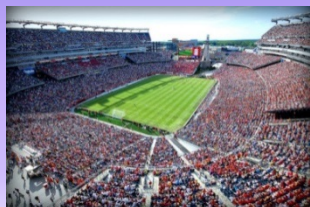
●歴代個人得点数

- 1位 ロナウド(ブラジル)15得点
- 2位 ゲルト・ミュラー(西ドイツ)14得点
- 2位 ミロスラフ・クロウゼ(ドイツ)14得点
- 4位 ジュスト・フォンテーヌ(フランス)13得点
- 5位 ペレ(ブラジル)12得点

最多ゴール数は元ブラジル代表のロナウド。1994年から4大会連続で出場し15得点を記録している。そして、今大会でその記録を更新するのではないかと期待されている選手がいる。ドイツ代表のクロウゼだ。2002年から3大会連続で出場し、現在通算14得点。6月9日に36歳を迎えたベテランストライカーは今大会も代表に選出され、レギュラーが予想されている。2得点を決めて、ロナウド超えを果たすことができるか。

Market Flash

～ワールドカップおもしろ雑学～



ワールドカップのおもしろ知識

- W杯全大会に出場しているのはブラジルのみ。今大会を含め、20大会連続での出場となる。
- W杯でペナルティーを受けた回数が最も多いのがフランスのジネディーヌ・ジダン。3大会12試合でイエローカード4回、レッドカード2回を受けたが、これには2006年大会の決勝で有名となった「頭突き事件」が含まれる。ブラジルのカフーもペナルティの数ではジダンに並び、4大会でイエローカードを6回受けた。
- W杯で最も多くの得点を挙げたのはブラジル。過去97試合で210ゴールを決めている。
- 優勝したことがなく決勝戦で敗れた回数が最も多いのがオランダの3回(1974、78、2010年)。ドイツは西ドイツ時代をあわせると、決勝で4回負けたが3回勝っている。
- W杯で優勝を経験した最年長選手はイタリアのゴールキーパー、ディノ・ゾフ。1982年の優勝時の年齢は40歳だった。
- ドイツはW杯で4回あったPK戦に負けたことはない。逆にイングランドは3回のPK戦に勝ったことがない。
- 南米で開催された4度の大会(1930年、50年、62年、78年)では、すべて南米の代表チームが優勝している。スペインが4年前の南アフリカ大会で優勝するまで、欧州の代表がヨーロッパ以外の開催国で優勝したことはない。
- 1954年のスイス大会まで、W杯がテレビ放送されることはなかった。
- FIFAは2018年ロシア大会から参加チームを40に増やす計画だ。
- W杯決勝にグローブを付けて出場したキーパーは、1974年大会の西ドイツ代表ゼップ・マイヤーが最初だとされている。それ以前、ゴールキーパーは全員、素手でプレーしていた。
- これまで19大会一度も破られていないジンクス、それは、**優勝チームはすべて自国の監督が指揮を取っている**





Market Flash



～ワールドカップおもしろ話～

優勝したチームを南米とヨーロッパで色分けしてみました。

●は自国開催で優勝したチームです。

第 1回 1930年 ウルグアイ大会	ウルグアイ代表●
第 2回 1934年 イタリア大会	イタリア代表●
第 3回 1938年 フランス大会	イタリア代表
第 4回 1950年 ブラジル大会	ウルグアイ代表
第 5回 1954年 スイス大会	西ドイツ代表
第 6回 1958年 スウェーデン大会	ブラジル代表 ←この大会だけ例外
第 7回 1962年 チリ大会	ブラジル代表
第 8回 1966年 イングランド大会	イングランド代表●
第 9回 1970年 <u>メキシコ大会</u>	ブラジル代表
第10回 1974年 西ドイツ代表	西ドイツ代表●
第11回 1978年 アルゼンチン大会	アルゼンチン代表●
第12回 1982年 スペイン大会	イタリア代表
第13回 1986年 <u>メキシコ大会</u>	アルゼンチン代表
第14回 1990年 イタリア大会	西ドイツ代表
第15回 1994年 <u>アメリカ大会</u>	ブラジル代表
第16回 1998年 フランス大会	フランス代表●
第17回 2002年 <u>韓国・日本大会</u>	ブラジル代表
第18回 2006年 ドイツ大会	イタリア代表
第19回 2010年 南アフリカ大会	スペイン代表
第20回 2014年 ブラジル大会	

1962年から2006年まで12大会は、南米→ヨーロッパの繰り返しになっていて、ワールドカップのジンクスのようなものになっていましたが、前回の南アフリカ大会でスペイン代表が優勝してリズムが崩れました。

過去19大会の優勝国の内訳は、南米9回、ヨーロッパ10回とヨーロッパがリードしています。

今回のブラジル大会の優勝は、バランスを取るために南米のチームになりそうです。

これまでの結果を見ると、**ヨーロッパとアフリカで行われた大会はヨーロッパが、南米と北アメリカ(メキシコ・アメリカ)とアジア(日本韓国共催)では南米が優勝**しています。

1958年スウェーデン大会のペレを擁したブラジル代表を除いては。

今回の2014年ブラジル大会の優勝チームは、ブラジルもしくはアルゼンチンの南米チームが有力か

Market Flash



～ワールドカップおもしろ雑学～

「2002年日韓共催ワールドカップ」の決勝戦が開催された日産スタジアムには、不思議なホワイトボードが今も保存されている。

決勝戦当日のブラジルの控室がそのままの状態に残されているのだが、そこに戦術がかかれたホワイトボードが、記入された文字と共に大切に残されている。

アルゼンチン

$1978 + 1986 = 3964$

ドイツ

$1974 + 1990 = 3964$

ブラジル

$1970 + 1994 = 3964$

$1962 + 2002 = 3964$

$1958 + 2006 = 3964$

実はこの数字、3964のジンクスというものである。

実は各回のワールドカップで優勝した国は、過去の優勝年の年度と合計すると3964のジンクスになるというのだ。

つまり、2006年のワールドカップの決勝時、ブラジルの首脳陣は選手たちに葉っぱをかけた。

「1958年に優勝しているブラジルが2006年の今大会は優勝する、なぜなら1958年と2006年を足すと3964になるからだ」

このジンクスに奮い立ったブラジルは見事、ワールドカップの優勝に輝いた。

2010年の優勝国は

$3964 - 2010 = 1954$ 年の優勝国、ドイツということになるっていたが、実際にはスペインであった。

そして、今年2014年は、 $1950 + 2014 = 3964$ つまり、1950年優勝のウルグアイが優勝ということになるが・・・でも、これだと過去の優勝国しか優勝できなくなる・・・なんてまじめに考えるほどのジンクスではなさそうだ。

今月のレポートは、かなり枚数が多くなってしまったので、経済マーケット情報については割愛させていただきます。
 ECBで利下げがあったことが大きな出来事であったほかは、日欧米中ともマーケットの大きな変動はなかった。来月は、アベノミクスの第3の矢の新成長戦略について詳しくご説明したい。